

館報

No.28

1983.6.

徳島大学附属図書館

有象無象考
西ドイツの図書館あれこれ
附属図書館の
業務電算化始動
DIALOGの利用状況

有象無象考

山田正興

近頃、色々の問題で、専門知識以外に識見を要望されることが多くなっている。ことに管理運営にたずさわる人には、特別な思考が必要となって、単に大衆操作だけで済まされない時代である。

この稿を図書館の依頼であると意識しても、長らく御無沙汰しているので、各論ではなく一般のことに触れることにする。大学の図書館は、本来、他の図書館と異なった目的と仕事がある。判り切ったことではあるが、大学という名の教育研究の現場にあることが特徴となっている。近頃、名著講読講座というユニックなアイディアがあって、学の内外から注目を浴びていることはともかく、結構なことではある。しかし、その沢山なテキスト？（有志購読書）の準備が図書館の仕事になっているらしい。何か初等教育の教科書の配膳係のような仕事はお気の毒である。

これも専門の仕事の付加業務として、ほんの一例かもしれない。何が専門で、何が付加の仕事であるのかということについては、どの職においても大切なことで、異論があろうし、それは運営委員会で討議されたらよかろう。こんな例が山ほどある中で、付加業務の方が本務を圧迫している中で、政府は行政を改革して、縮減しようという相矛盾する時代に入ろうとしている。嘗て、図書館の仕事として情報収集過多に対応して、無用情報を切り捨てる仕事も大切であることを述べたことがある（MLニュース7巻4号1972, No47）。

付加的業務は図書館ばかりでなく、大学の先生にも沢山ある。本省や県、その他学の内外の〇〇委員の類である。我が国では、指名されると、余程の理由のない限り、伝統的に拒否できず、無料奉仕か、雀の涙程の手当に甘んじて、付加的な仕事に流用されることになる。大学の先生は専門馬鹿として通用すれば、何も問題はないが、名誉職にもならぬ付加的業務に流用される点では例外ではない。このような付加の仕事が増加する一方で、民主的管理者は多数の支持に媚びる策に傾き易いために、大衆操作予算が増加し、国や自治体の運営を危くしている、その現状には、何処でも歯止めがあるわけでもないが、国立大学という組織には、設立当初から予算の枠などの

歯止めがある。現今は経済が同時に行政とからみ、高等教育も経済とからむ点では、否応なしに行政と独立できない。不本意であっても、行政の歯車に連動するので、行革の場にもされる。行政上、膨張した後人数と同様に教授の数も増大したのであろうか。勿論、質的に異なる役人を同一視はできない筈ではあるが、増大したのは戦後の申し子で、税金を喰う点では変わらない存在である。先に申したように、「何が付加で、何が専門であるか」を考える同一面上の次には、「どの領域（学）が有用で、何が無用か」という貧すれば鈍するような外圧が加えられつつある。同学内でも、学問別にあっても、何らかの厳選の時代に入りつつあることは避けられない事実である。これは、戦後、選ばれた学者を含めて役人のすべてに、徒食を問うことになるであろう。何らかの評価されうる能力の時代になる。それはよいとしても、評価をうける側の条件はどうなることであろうか。まさに小さな専門馬鹿では無視される時代である。晩成型の未完の学問にとりくんでいる学究には、まことに不幸な時代となりそうである。

この点を又、元の論旨にもどって見るとき、後世、学会や学究組織の管理運営の任にある者の見識が真に問われる筈である。なんとなれば、管理者が取捨選択の原点に立たされるからである。もろもろの問題の中のほんの一例として身近にあるものの一つに、医学部事務組織の一体化がある。本来、二元化されていた教育研究事務の任にある医学部事務と附属病院の診療事務の一元化である。予算規模が大きい方に埋設されることなく、本来の二元的事務が達成できる行革となつてほしいことは論をまたない。戦後、全国各県にあった県立医専から国立大学医学部となった時代の要請を思い出して、今更国立大を地方の国立病院化への転進にならなければ幸いである。この種のことを愚考すると、当今の付加的問題の中には単に、その場、その場の問題の他に、将来の変節の役割をもつような問題もあって、とても専門馬鹿として、判断し難い。

再び、図書館に話題を戻す時に、本学にあっては、創立時の合同期という時期から、本館と分館の両立期に入り、更にそれぞれの改築期を経ている。その間に、第一次オイル・ショックなどで次々に予算の頭打ちもあったが、総じてプラスの方向に進んで来たことは同慶にたえない。しかし、今日の国の財源の流れから予測すると、取捨選択、節約の中で、如何に時代的要請を充たすかという難問に対応しなければならない。増成長の時代よりも知恵を要する所以である。それには一冊の名著の購入にしても、取捨選択の要を思うのである。これは、ケチやサービスの欠如とは思わない。運営への合理実践の第一歩であるからである。

(医学部教授)

西ドイツの図書館あれこれ

後藤健次

いささか旧聞に属しますが、私は昭和51年5月から8月半ばまで、主として西ドイツ各地を遍歴する機会に恵まれました。その中から図書館についての思い出をあれこれ書き記してみたいと思います。

現在の西ドイツを南北に大別する二大勢力は、遠くハンザ同盟に由来する北のハンブルクと、南方の、オーストリアに接するバイエルンの大都会ミュンヘンということになりましょう。図

書館についてもハンブルクには、西ドイツの北半分を網羅するStaats- und Universitätsbibliothek（国立兼 大学図書館）が大学の近くにあります、南半分をカバーするミュンヘンには Bayerische Staatsbibliothek（バイエルン国立図書館）が堂々たる宮殿の趣きをもって君臨しております。この豪壮な建物はまさに宮殿と呼ぶにふさわしく、大学の近く、ルードヴィヒ通りにある小さな入口（くぐり戸といったごく一部だけの開閉が常用）を入ると、劇場のような立派なクロークを経て、宏大な廊下を通して目録室と受付の部門へ、さらに二階の運用係へと順序を追って進みます。運用部門には、日本の図書館のイメージとは違って、屈強な男の係員が数名待ち受けていて応接してくれますが、30分くらい必ず待たされます。というのは、そういう区切った時間にそれまでたまった申込者の分をまとめて、一斉に書庫の検索が始まるようです。少々お役所めいた固苦しさや不便さがあります。閲覧室の清潔にして広大なことはもちろんですが、図書のコピーについては、専用のコーナーがあり付属の会計係に料金を支払って、200ページくらいの本などあつという間に職員がコピーしてくれます。汚損を防ぐためのシステムでありましょう。また南ドイツを支配する図書館としての機能を十分に発揮してくれるのは Information の担当者たちです。二重三重に段階的に組織されていて、当時はまだ膨大なカードの集積を駆使しておりましたが、体系的な活動の得意なドイツ人ですから現在ではいち早く電算化していることと察せられます。この本は戦災で焼失したとか、10年前に貸出したまま未返却であるとか、すぐに判明いたします。またミュンヘン市内にも大学図書館の外に、大小さまざまな公立の図書館がありますが、私も Information で二、三そういう小さな図書館を紹介されて、希望の本を探りあてたことがあります。そういう小規模の図書館は、長時間待たされることもなく、セルフサービスのコピーの機械が置いてあり、しかも建物の隣が銀行になっていてコピー用の小銭を走って行って換金してもらえするという便利さです。

余談になりますが、この大図書館の近く、つまりミュンヘン大学の周辺には沢山の新旧の本屋が軒を並べております。この大学は西ドイツ最大の規模で、その建物の配置は実に複雑をきわめております。講義室棟の一階に思いがけず本屋があつたりして驚かされます。特に教科書専門の店というわけでないのですが。従ってこの辺を散歩するのはまことに楽しい限りで、アマールエ通りとかシェリング通りとかそれぞれ個性的な名の通りを、夏の日には長くなかなか暗くなりませんので心ゆくまで何度も往来いたしました。折しもハイデッカーの亡くなった年で、本屋に特別のコーナーが設けられていたことも思い出されます。

それに対して北の拠点ハンブルクのStaats- und Universitätsbibliothek は、土地柄のせいかそれほど豪華な建物ではありませんでした。円形の建物の一階のフロアの中心部は目録室になっていて、それを取り囲んで事務室が並んでおります。ここでも Information 機能は充実していて、館員はそれを誇りにしているようです。この図書館でお世話になったことは、徳島大学の同僚の依頼でドイツの古い作家の全集を全巻コピーすることでした。ハンブルク大学文学部の図書館で紹介してもらえという偶然もあって、真夏にもかかわらずネクタイを締め直して、恐る恐る出頭して用件を述べたところ、長い廊下を別室へ案内され責任者の方に会わせていただきました。何しろ150年以上も経つ古い本なので、やはり万一の場合を心配されていろいろ事情を聞かれましたが、できる限りのドイツ語を並べて、毎日何冊かを貸出してもらいコピー業者に依頼したい旨を申し上げました。結局この話は何時間か後に返事があって、ミュンヘンの例の大図書館へ行ってはどうかと丁重に断われたわけですが、ドクター・ヴィルムスという温厚な紳士

の、見知らぬ外国人に対する誠意のこもった説明に満足して引き下った次第です。

もっともこういうコピーについては、ずっと後になって知ったことですが、小さな工場を持っていてコピーの製本まで完成するという便利な業者がありました。ヒエロニムスという特異な名前の、いかにもドイツの商人らしい中年の男と何度かあわだだしく会ったり、彼の仕事場へ行ったりしました。彼は西ドイツのどんな図書館にもコネがありコピーできると豪語しておりました。また実際に彼の世話で入手したコピーもあります。ただその値段が相当なものであることは付記したいと思います、場合によってはそれだけの値打ちは十分あるものと考えられます。

ミュンヘン、ハンブルクという二大都市の図書館について思い出すまま述べてきましたが、地方都市にもそれぞれ大学図書館があるのはもちろんですが、ふらりと立ち寄った外国人でも意外なほど簡単に、何の手続もなしに閲覧させてもらったり、書庫を見せてもらったりしたことは驚くべきことでした。もちろん貸出となると話は別でしょうが。伝統ある大学都市、例えばチュービンゲン大学図書館の、玄関に飾られた歴代の世界的学者の肖像など深く印象に残っております。
(教養部教授)

附属図書館の業務電算化始動

かねてから館員によって対象業務等について精力的な検討をつづけておりました待望の電算機の機種が4月22日開催の電子計算機センター運営委員会で承認されました。(構成図5ページ参照)

このことによって、いよいよ59年度稼働を目標に実践的な取り組みに入る段階となりました。図書館では先に情報検索用端末機を設置し、国内外のデータベースに接続して、すでに研究者の方々には好評裏に利用されていることは、本号6頁に報告のとおりです。

業務の電算化については、上記のような経過をたどって来たわけですが、そこで検討された成果をこの紙上を借りて報告し、利用者をはじめ学内識者の方々の御協力を得られれば幸いです。

まず、図書館業務は5つのサブシステムをもったトータルシステムとしてゆきます。これらのサブシステムは

閲覧サブシステム	図書サブシステム	目録サブシステム
雑誌サブシステム	予算サブシステム	

となっており、スタートは閲覧サブシステムを予定しております。以降のサブシステムもできるだけ早い機会に完成を目指したいと思っております。以下に閲覧サブシステムの概略を記して現行との比較で見たいと思います。

閲覧サブシステムとは

図書、雑誌の貸出、返却及びそれに伴う情報の処理システムです。カウンター端末機のOCR(光学文字読取装置)ハンドスキャナーを使って、貸出の条件(冊数、期間、資格等)を点検し、貸出、返却処理は従来の手作業から電算機による処理となります。このシステムには、このほか利用者が必要とする図書が貸出中の場合の照会、予約や、返却が遅れた時の督促状の打出し、貸出停止などが機械的に実行されることとなります。

このシステムの対象となる図書は、本館では開架室の約5万冊と分館では開架室の図書と、ある程度の選別をされた製本済雑誌を含めた約5万冊となり、研究室等へ貸出されたものとか貸出されるものは上記サブシステムのすべてが開発された時点となります。

以上のようなことが日がたつと共に判然として来るのが58年度の図書館の業務電算化だと思のです。今後進展して行く都度揭示等でお知らせすると共に、次号の館報にはその詳細が報告されるのではないかと思います。

つぎに図書館を利用される際に聞かれる言葉の説明をしておきます。

1) 図書館利用証

図書館を利用するための身分証明書であり、図書等の借用書となります。紛失したらただちに届け出ないと他人に利用されると大変です。

2) 貸出手続

借りたい図書と利用証を係員に差出すだけで済みます。

3) 返却手続

返したい図書を係員に渡すか、玄関に備えてあるブックポストに入れるだけで済みます。

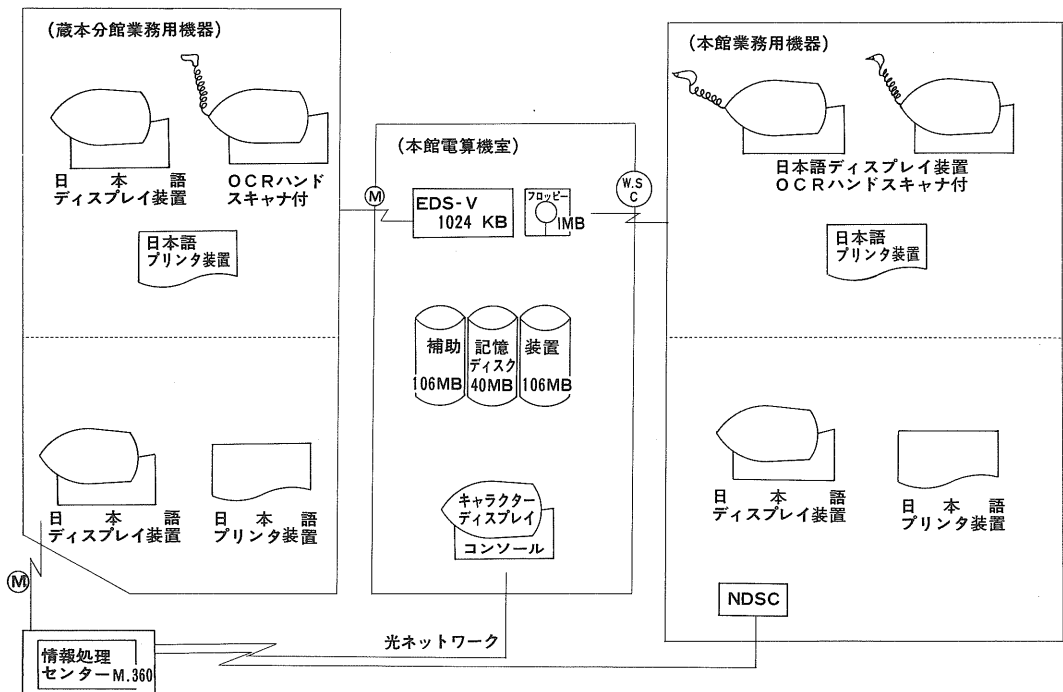
4) 罰則 — 返却遅延措置 —

返却が遅れますと自動的に幾日間か貸出停止措置がとられます。うかうかできません。

5) 督促 — 未返却 —

返却が遅れて、なお返却されないときはリストまたはハガキとなって出力され揭示または郵便督促されます。

附属図書館業務電算化機器構成図



6) 照会

自分の借りたい本が見当たらない時に、いつ返却されるか等の照会で、直に回答されます。

7) 予約

6)の照会で判明した図書が返却され次第借りたい希望があるときにする手続きで、その図書が返却されると優先して借りられます。(受入係長)

DIALOG の利用状況

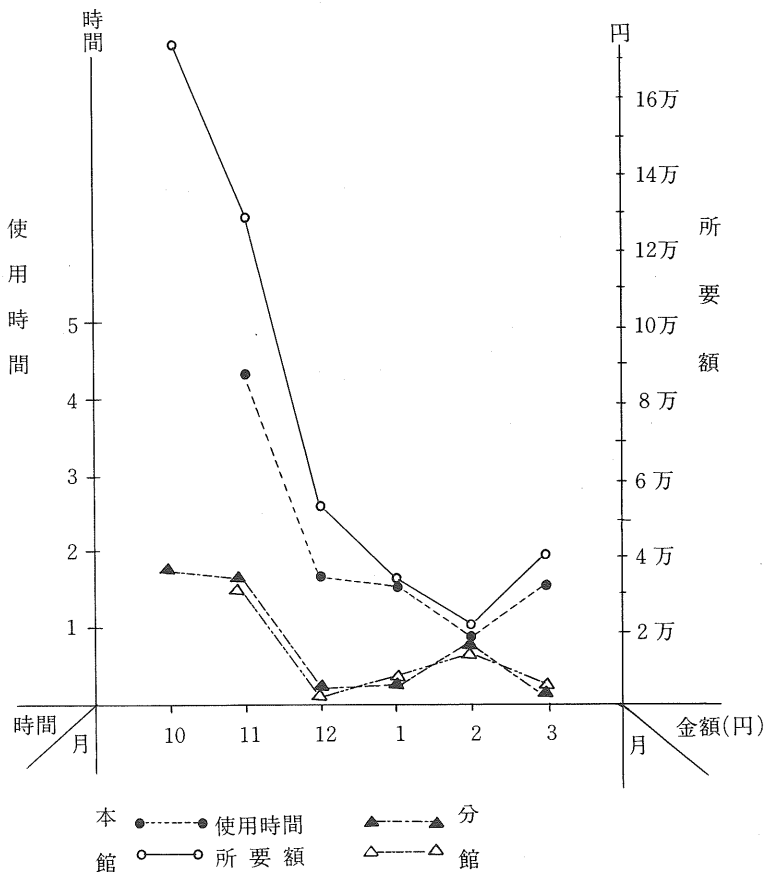
昨年10月に使用が開始されたDIALOG情報検索も半年がたった。利用状況を集計してみました。月別に集計したのが表1である。表1の使用時間と所要額をグラフにした。(図1)10月に説明会を開いたこともあってか、利用が他の月に比較して多い。11月が件数、使用時間共に一番多く、後は少なくなって利用者も限られてきた。

分館は、JOISも行っているので、DIALOGの使用はそう多くなく、これだけで云々してみてもあまり意味がないと思われるが、学部別に集計し直してみた。(表2)利用者は、自然、工学系の教官が圧倒的に多い。

ファイル別では表3の結果となる。CASEARCHが最も多く使われているようである。くわしい分析は次の機会にゆずりたい。

参考までに、1件当りの平均検索時間は約5分、それにかかる費用は約2,540円であった。抄録を何冊も繰る時間を思えば、上手に使うと便利なものだといえる。一度試してみませんか。

図1 昭和57年度DIALOG利用状況(月別)



(運用係 岡田記)

表1 昭和57年度DIALOG利用状況(月別)

		月							計
		10	11	12	1	2	3		
本館	人数	14	11	7	6	4	4	46	
	件数	36	52	20	25	14	17	164	
	使用時間	3.012	4.374	1.743	1.647	0.952	1.627	13.355	
	プリント件数	2,317	342	187	0	71	123	3,040	
	タイプ件数	24	55	25	30	12	77	223	
	所要額(百円)	1,738	1,275	523	329	213	401	4,479	
分館	人数		7	1	2	4	2	16	
	件数		24	1	7	9	10	51	
	使用時間		1.654	0.179	0.345	0.837	0.246	3.261	
	プリント件数		0	0	0	0	0	0	
	タイプ件数		13	0	32	8	6	59	
	所要額(百円)		307	26	87	154	58	632	

表2 昭和57年度DIALOG利用状況(学部別)

項目	学部	教育学部	医学部	歯学部	薬学部	工学部	教養部	短期大学部	図書館	合計
人数		9	4	3	5	13	9	12	7	62
件数		31	15	6	20	44	28	55	16	215
使用時間(時)		2.8	0.772	0.543	0.812	2.621	3.394	4.856	1.007	16.805
プリント件数		151	0	0	0	6	2,742	141	0	3,040
タイプ件数		24	13	0	46	93	34	72	0	282
所要額(百円)		607	172	85	190	666	2,042	1,147	205	5,115

表3 ファイル別集計

ファイル名	ファイルNo.	本館					分館				
		人数	件数	使用時間	プリント件数	使用料\$	人数	件数	使用時間	プリント件数	使用料\$
ERIC	1	6	7	0.17	3	4.55	1	1	0.263		6.575
BIOSIS	5 55	7	12	1.26	1425	286.83	2	4	0.287		16.646
SOC SCISRCH	7	2	2	0.022	2	2.82					
PSYCINFO	11	7	7	1.379	764	164.515					
INSPEC	12 13	4	6	0.447	199	80.725					
OCEANIC ABSTRACT	28	1	1	0.116	5	9.718					
CHEMSEARCH	30	1	1	0.07		9.1					
CHEMNAME	31	1	1	0.029		3.77					
MATADEX	32	1	1	0.112		9.16					
SCISEARCH	34 94 186	6	17	1.054	15	70.76					
SPIN	62	7	8	0.9	56	37.1					
MLA ABSTRACT	71	1	1	0.193		10.615					
EXCERPTA MEDICA	72 73 172	3	8	1.193	296	141.815					
LIFE SCICOLLECT	76	1	1	0.064		2.88					
MEDLINE	152 153 154	2	11	0.778	22	30.42	7	17	1.397		48.895
MATHFILE	239	2	3	0.25		13.75					
CASEARCH	308 309 310 311 320	19	77	5.318	476	420.432	8	29	1.314	59	89.996

文献複写(枚数)

(昭和57年度)

		附属図書館(本館)	分館	計
文献複写	教職員	73,894 (枚)	65,860 (枚)	139,754 (枚)
	学生	458	5,599	6,057
	その他	7,931	18,124	26,055
	計	82,283	89,583	171,866

相互利用(人数)

(昭和57年度)

		附属図書館(本館)	分館	計
相互利用	教職員	363 (人)	1,013 (人)	1,376 (人)
	学生	49	140	189
	その他	599	1,825	2,424
	計	1,011	2,978	3,989

相互利用(件数)

(昭和57年度)

		附属図書館(本館)	分館	計
相互利用	教職員	1,834 (件)	1,788 (件)	3,622 (件)
	学生	174	269	443
	その他	1,014	3,089	4,103
	計	3,022	5,146	8,168

参考調査(人数)

(昭和57年度)

		附属図書館(本館)	分館	計
参考調査	教職員	2,990 (人)	3,555 (人)	6,545 (人)
	学生	1,846	1,482	3,328
	その他	62	19	81
	計	4,898	5,056	9,954

参考調査(件数)

(昭和57年度)

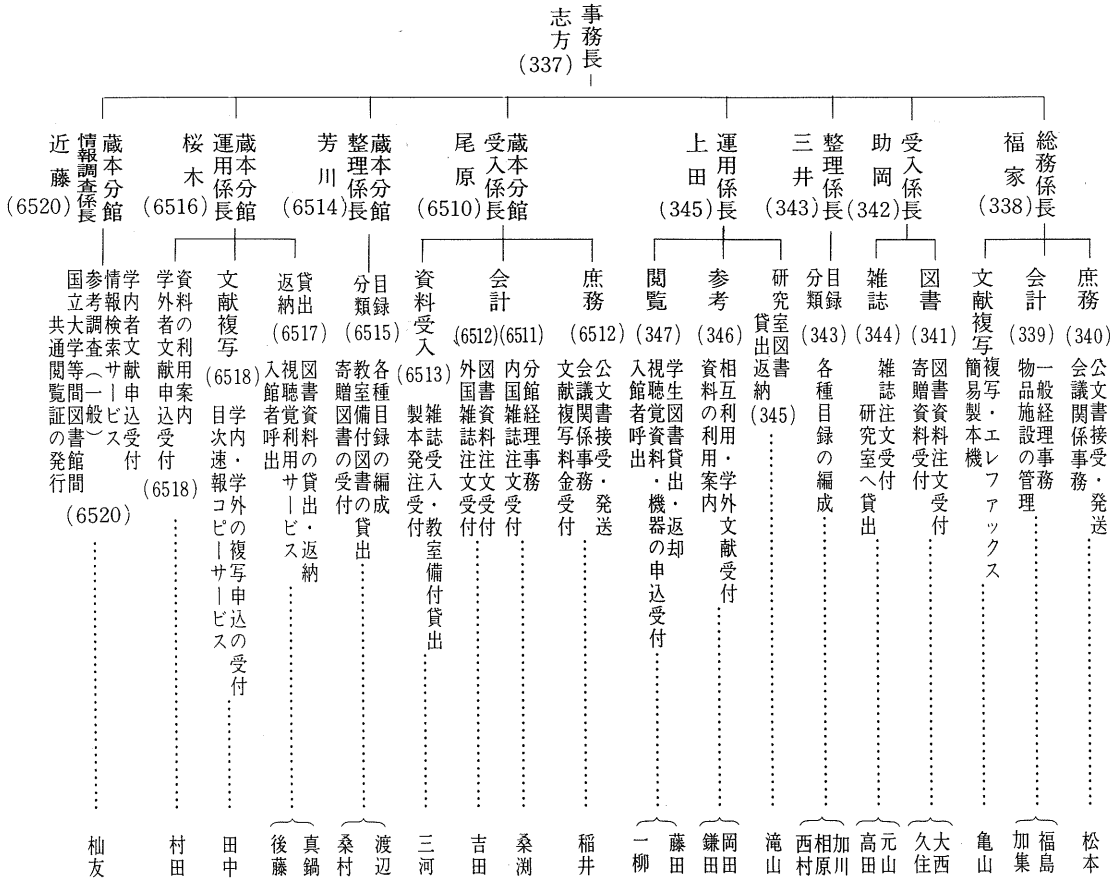
		附属図書館(本館)	分館	計
参考調査	教職員	3,866 (件)	3,839 (件)	7,705 (件)
	学生	1,944	1,630	3,574
	その他	95	32	127
	計	5,905	5,501	11,406

【附属図書館運営委員会委員名簿】

昭和58. 4. 2 現在

所 属	氏 名	任 期	所 属	氏 名	任 期
図書館長	小林 茂	57. 4. 2~59. 4. 1	歯学部教授	高木 知道	57. 4. 1~59. 3.31
蔵本分館長	高田 充	57. 4. 1~59. 3.31	薬学部教授	塚谷 博昭	57. 4. 1~59. 3.31
教育学部教授	本多 浩	57. 3. 1~59. 2.29	" 助教授	寺田 弘	57. 3. 1~59. 2.29
" 助教授	石井 愷義	57. 4. 1~59. 3.31	工学部教授	浦川 和馬	57. 3. 1~59. 2.29
医学部教授	松本 圭蔵	57. 4. 1~59. 3.31	" 教授	森吉 孝	58. 4. 1~59. 3.31
" 教授	山本 尚三	57.10. 1~59. 3.31	教養部教授	後藤 健次	57. 3. 1~59. 2.29
歯学部教授	坂東 永一	57. 4. 1~59. 3.31	" 教授	八木 静夫	57. 4. 1~59. 3.31

附属図書館事務組織図



蔵本分館に情報調査係新設

昭和58年4月1日付けをもって蔵本分館情報調査係が新設されました。したがって蔵本分館に3係あったものが4係となりました。情報調査係の所掌事務は、徳島大学附属図書館事務分掌細則の一部改正により下記のとおり定められた。

記

徳島大学附属図書館事務分掌細則の一部を改正する細則を次のように定める。

昭和58年4月1日

徳島大学附属図書館長 小林 茂

徳島大学附属図書館事務分掌細則の一部を改正する細則

徳島大学附属図書館事務分掌細則の一部を次のように改正する。

第2条第1項中「7係」を「8係」に、「蔵本分館運用係」を「蔵本分館運用係・蔵本分館情報調査係」に改め、同条第3項中第6号を第7号とし、第5号を第6号とし、第4号の次に次の1号を加える。

五 資料の支出負担行為の手續に関する事。

第2条第6項中第15号を第16号とし、第3号から第14号までを1号ずつ繰り下げ、第2号の次に次の1号を加える。

三 公文書の接受、発送、編さん及び保存に関する事。

第2条第8項中第7号から第11号までを削り、第5号及び第6号を次のように改める。

五 利用統計に関する事。

六 その他運用事務に関する事。

第2条第8項の次に次の1項を加える。

9 蔵本分館情報調査係においては、蔵本分館における次の事務を分掌する。

一 参考資料の調査に関する事。

二 目録の検索指導、利用案内に関する事。

三 学術文献の調査及び速報に関する事。

四 資料の複写に関する事。

五 資料の相互利用に関する事。

六 その他情報調査事務に関する事。

附 則

この細則は、昭和58年4月1日から施行する。

会 議

附属図書館運営委員会(昭和57年度第6回～第8回)

○第6回 昭和57年12月13日(月)

(於 附属図書館)

議 題

1. 昭和57年度学生用図書購入費(追加分)の
予算額の変更について

2. 昭和57年度外国雑誌購入費の予算額の変更
について

3. 蔵本地区のリモートバッチステーションの
設置について

4. その他

○第7回 昭和58年1月31日(月)

(於 蔵本分館)

議 題

1. 昭和57年度予算節約額について

2. 非常勤職員の給与改定に要する経費につ
いて

○第8回 昭和58年2月21日(月)

(於 附属図書館)

報 告

附属図書館運営委員会(昭和58年度第1回～第2回)

○第1回 昭和58年4月25日(月)

(於 附属図書館)

議 題

1. 附属図書館の本年度の運営方針について

2. 昭和59年度概算要求事項等について

3. その他

○第2回 昭和58年5月23日(月)

(於 蔵本分館)

議 題

1. 昭和57年度附属図書館経費決算書について

2. 昭和58年度附属図書館経費所要額について

出張

(昭和57年11月30日～昭和58年5月31日)

- 11月30日 徳島県図書館大会
(於 阿南市立図書館)
出席者 受入係長 助岡 君二
- 2月1日
～3日 オンライン情報サービスセミナー
(於 紀伊国屋書店関西センター)
出席者 蔵本分館整理係長 桜木 強
- 2月23日
～25日 事務打合せ
(於 名古屋大学附属図書館・大阪大学附属図書館)
出席者 蔵本分館運用係長 近藤 英子
受入係 元山 光代
運用係 岡田 恵子
- 2月23日
～25日 JOIS研修会
(於 日本科学技術情報センター大阪支所)
出席者 蔵本分館運用係 柚友 友子
- 3月9日
～11日 事務打合せ
(於 山口大学附属図書館・愛媛大学附属図書館)
出席者 総務係長 福家 健二
受入係長 助岡 君二
蔵本分館運用係 村田 康彦
- 3月18日
～19日 事務打合せ
(於 岐阜大学附属図書館)
出席者 蔵本分館受入係長 尾原 忠雄
- 3月23日
～25日 事務打合せ
(於 岡山大学附属図書館・鳥取大学附属図書館)
出席者 総務係 福島 潤
蔵本分館受入係 桑渕 勇
" 吉田 敬治
- 5月9日
～11日 第31回中国四国地区大学図書館協議会総会

(於 オークラホテル(高松市))

出席者 図書館長 小林 茂
事務長 志方 顕次

- 5月23日
～25日 昭和58年度国立大学附属図書館事務部課長会議
(於 東京医科歯科大学)
出席者 事務長 志方 顕次

人事往来

(昭和57年12月2日～昭和58年5月31日)

- 附属図書館運営委員会委員
森吉 孝 (工学部教授) 58.4.1
- 前附属図書館運営委員会委員
杉尾捨三郎 (工学部教授) 58.4.1(停年退職)
- 退職 上北 博 運用係 58.2.28
藤 早苗 蔵本分館運用係 58.3.24
明石 哲宏 総務係 58.3.30
泰地 祥子 整理係 58.3.31
工藤 英一 運用係 "
- 採用 亀山 高稔 総務係 58.4.1
一柳千鶴子 運用係 "
- 金沢 誠治 " 58.4.12
熊沢 節子 蔵本分館運用係 "
- 昇任 上田 智一 運用係長 58.4.1
(前受入係)
- 配置換 秋山欣之介 教養部事務長 "
- (前附属図書館事務長)
- 志方 顕次 附属図書館事務長 "
- (前庶務部庶務課課長補佐)
- 芳川 詩 蔵本分館整理係長 "
- (前運用係長)
- 桜木 強 蔵本分館運用係長 "
- (前蔵本分館整理係長)
- 近藤 英子 蔵本分館情報調査係長 "
- (前蔵本分館運用係長)
- 大西 恭子 受入係 "
- (前蔵本分館運用係)
- 勤務換 渡辺 章夫 蔵本分館整理係 58.1.1
(前蔵本分館運用係)
- 斎藤 友子 蔵本分館運用係 "
- (前蔵本分館整理係)

勤務換 加川 徳子 整 理 係 58.4.1 (前運用係)	3月8日	運用課運用第三係 田中恵美子氏 東京大学医学部
西村 眞弓 整 理 係 // (前運用係)	3月9日	図書主任 津野 潤三氏 東京大学文学部
滝山奈美江 運 用 係 // (前整理係)	3月16日	図書室 柴尾美紀子氏 愛媛大学附属図書館医学部分館
柚友 友子 蔵本分館情報調査係 // (旧姓 齋藤) (前蔵本分館運用係)	3月17日	整理係長 高市 照一氏 宮崎医科大学教務部
田中 賢恵 蔵本分館情報調査係 // (前蔵本分館運用係)	3月17日	図書課長 河田 政雄氏 広島大学附属図書館工学部分館
	3月24日	図書係 西本 勉氏 東京大学附属図書館
	3月25日	閲覧課長 相良 侯秀氏 大阪大学附属図書館
12月2日 文部省学術国際局情報図書館課 課長補佐 勝村 光彦氏 事務官 長岡 篤氏		閲覧課長 十川 一登氏 閲覧課閲覧第三係長 河崎 戒三氏 整理課会計掛 小東 義貴氏 // 和漢書目録掛 生田 量子氏
2月24日 岡山大学附属図書館教育学部分室 図書係長 近藤 弘子氏	3月29日	佐世保工業高等専門学校 庶務課図書係長 近藤 利夫氏
2月24日 筑波大学図書館部 学術情報課参考第三係長 山崎 好子氏		

来 館 者

(昭和57年12月1日～昭和58年5月31日)

お知らせ

- 「雑誌目録欧文編1982年版」が、このほど刊行されました。前回(1978年版)よりタイトルの活字も太くなり、各頁には見出しも付けて見やすくしました。すでに各部局、教室等には配布してありますので大いに御活用ください。尚図書館二階カウンターにも備付てあります。

—— 出版物をご寄贈下さい ——

最近、学内の学会等で出版している雑誌の論文複写依頼がふえておりますが、図書館に備付けてないものが多く、要求に応じられない場合があります。できましたら出版の際、図書館にご寄贈願ひ、広く利用させていただきたいと思ひますので、よろしく願ひいたします。

目 次

有象無象考…………… 1	蔵本分館に情報調査係新設……………10
西ドイツの図書館あれこれ…………… 2	会 議……………11
附属図書館の業務電算化始動…………… 4	出 張……………12
D I A L O G の利用状況…………… 6	人 事 往 来……………12
図書館統計…………… 8	来 館 者……………13
附属図書館運営委員会委員名簿…………… 9	編 集 後 記……………14
附属図書館事務組織図……………10	

開 館 時 間

授 業 期		休 業 期	
月 ~ 金	土	月 ~ 金	土
9時～20時	9時～16時30分	9時～17時	9時～12時30分

編 集 後 記

附属図書館運営委員に一部交替がありましたので附属図書館運営委員会委員名簿と又、職員も配置換・勤務換がありましたので附属図書館事務組織図も掲載しました。

DIALOG を本館と蔵本分館に導入しましたのでその利用状況を報告します。これからも大いにご利用下さい。

編集：発行 徳島大学附属図書館
 (〒 770) 徳島市南常三島町 2 丁目 1 番地 徳島 (0886) 23-2310 内線 (338)